乳癌の検査について

日本臨床検査専門医会
遠藤 久子

■乳癌はどうして増えたのですか？

働き盛りの女性の罹患する癌の中で、乳癌は日本では罹患率・死亡率とも第1位といわれ、20人に1人が罹患するといわれます。米国では８人に１人といいますから、大腸癌と同様、食の欧米化が関与する可能性があります。乳癌はエストロゲンという女性ホルモンへの感受性を有する症例が多く、発癌の危険因子の検討では、少子化、初潮の低年齢化、閉経の高年齢化等、長期にわたりエストロゲン高値の状態であるのが以前と異なるといわれます。エストロゲンの低値になる閉経後にも乳癌はありますが、周囲脂肪細胞にはアロマターゼという酵素があり、男性ホルモンをエストロゲンに変化させることがわかりました。

■乳癌のよい発見方法はありますか？

乳腺は自分で簡単に触れられるところにあり、自己検診が可能です。通常は「しこり」で発見されます。その他乳房の形状の変化や乳頭からの血性分泌物など、自己検診法のパンフレットを保健所、病院、検診会場、乳癌の講演会、健康に関する本等で手に入れ定期的に実行しましょう。しかし自己検診では径2cm前後の癌が発見される頻度が高いとのことで、市町村、職場等での乳癌検診の併用が大切です。家族に乳癌の方がいる場合は積極的な乳癌検診が必要です。「しこり」は癌だけでなく、良性のものもありますが、専門医の下で必ずその性状を確かめましょう。20人に1人の頻度は他人事ではありません。不安を持って生活するより検査をして対応を考えましょう。

検診で安心！

■どんな検査が行われるのですか？

検査には、触診、超音波検査、マンモグラフィー（乳房レントゲン）が一般的で、触診では触れにくい小さなものも見つかります。癌が疑わしければ穿刺吸引細胞検査、穿刺組織検査が行われます。マンモグラフィー併用検診で、非浸潤性乳管内癌や径2cm以下のⅠ期早期癌の割合が増加しています。これらの大部分は切除後良好な経過をとります。身体の奥深くにあり気づくのが難しく、発見の遅れる癌もありますが、乳癌が治癒率良好な癌である理由の1つは早期に発見されやすいからです。

■手術方法や治療方法にも検査があると聞きましたが…

現在手術方法も進歩し、乳房温存術で目立たなく、乳房再建術も発達しています。手術中にリンパ節への転移を調べる検査では手術範囲を縮小し、術後の合併症を減らします。とられた検体は病理標本で広がりを検査します。治療には通常、組織標本での細胞の悪性度の検査、ホルモン感受性検査、乳癌を標的とする治療の検査が行われ、治療方法が決定されます。